

文化的技術としての語*

萩澤大輝

hagisawa_daiki@yahoo.co.jp

キーワード：語 技術 概念工学 文化進化 独立発明

要旨

本稿は「語とは何か」という存在の問いに技術論の観点から解答を与えるものである。まず Arthur (2009) の技術論を援用し、語を文化的な技術と捉えるモデルを提示する。続いて、これに基づく語の時空的位置、機能、異常、累積的变化、逆行分析 (reverse engineering)、制御の困難性、独立発明といった点について、妥当な説明が与えられることを具体的に示す。これにより、語および語形成をよりよく理解することが可能となる。

1. はじめに

本稿は「語とは何か」という問いに対して有望と思われる解答の一つを提示するものである。この問いは (i) 語は句や形態素など他の言語単位からいかに区別されるか、(ii) 語は何という類に包摂される存在か、という二通りの理解が可能であり、本稿の主たる関心は後者である。したがって、言語普遍的に妥当な語概念を定式化するという類型論的な議論は行わない。

上記の二つの理解について「水とは何か」を例に整理する。水らしき存在としては水道水やコーラがある。これらは H_2O の他に塩素・砂糖などを含有している。そして水道水は水と見なされ、コーラは水とは見なされにくい傾向があると思われる。このように、境界事例を検討することで対象を明確化しようとする場合、それは境界を問う研究である。一方、水とは液体の一種であるとか、化合物の一種であるという解答を求める場合、それは存在を問うタイプの研究と言える。そして繰り返しになるが、本稿は語の存在を問う研究に位置づけられる (なお、哲学における語の存在論に関する簡便な概説としては Miller (2020) がある)。

さて、語という存在の解明に伴う困難の一つは、語に様々な側面があるという点である。すなわち、紙に記された筆跡も、人間が口から発する音波も、個人の脳内に記憶された神経活動のパターンも、社会的に共有された形式と意味のペアも、いずれも語と見なされうる。そのため、水とは何かという問いに「 H_2O という構造を持つ化合物である」のような解答が仮に可能だとしても、同じように語の「本質」を一言で述べようとすると反例が生じることは避けられない。しかし、語は語でしかない (*sui generis* である) と言うだけでは理解はまったく進まない。ここで認知言語学的な立場を取ると解決の糸口が得られる。本質が規定できないこと自体は問

* 筆者は平沢慎也氏から Steven Johnson 著 *How We Got to Now* という示唆に富む一冊を教えていただき、本稿の着想を得た。また田中太一氏との議論からも非常に多くを学んだ。感謝申し上げます。

題でないと考えることが可能となり、さらに多様な相の下に語を捉え、それを重ね合わせていくことで語の実態に迫るといふ道が開かれるのである。本稿はこの路線を取る。

より具体的に述べると、本稿は語を「文化的な技術」と捉えるモデルないし言語観を提案する（詳細は後述）。この試みには、語彙の研究で採用されている概念の内実を明らかにし、そうした概念同士の関係に整合的な解釈を与えるという意義がある。特に、語の変化や融合というプロセスが一体どのような現象なのか、その理解が進むという点がこのモデルの長所である。当然ながら、このモデルのみで語という存在の全容がくまなく解明されるわけではない。あくまでも多様な見方を重ね合わせる営みの一環として理解されたい。

本稿の背景には萩澤（2018, 2020）の語形成基礎論がある。特に萩澤（2020）では語を素朴実在論的に、すなわち明確な境界を持った個物のように捉えることによる議論の混乱を指摘し、融合・分裂などを許す柔軟な存在であるミームと捉える見方を提案した¹。それに対して「語がミームであるなら、具体的にどのようなミームか」という問いが生じうるが、その可能な応答の一つが文化的技術ということになる。

最後に、語に注目することの正当性について述べておく。記号的文法観（Langacker 2008）に基づくと、語彙と文法は連続体をなすものと考えられる。その意味で、様々な言語単位の中で語に特権的な地位は与えられない²。しかしながら、言語学の内部では存在論的な議論の意義が理解されづらいため、いきなり抽象的・一般的に「記号」や「構文」などの存在論的ステータスを問うことは議論の提示順序として現実的でない。一方、境界を問題にする「語とは何か」の議論は言語学でかなり検討が進んでおり、一定の成果が上がっているものと見なすことができる。その成果を引き継ぎ、さらに語の存在を問うことで理解を進展させるという研究方針は比較的理解されやすいと思われる。また、筆者が語や語形成に個人的に強い関心を持っていること、語以外の対象も広く射程に含めて議論することは筆者の能力を超えていることなども、語に焦点を絞って議論することの理由である。付言しておく、本稿での議論は語以外の言語単位・記号的対象にも当てはまる部分がある。語にしか成立しない議論だと考えているわけではないという点に注意されたい。

全体の構成は以下の通りである。2節では語を技術と見なす考え方を概観する。3節はそのモデルによって語の持つ種々の特性や現象が整合的に理解されることを順に示す（3.1～3.7節）。4節はまとめである。

2. モデルの導入

技術が一般にどのような特性を持つか、技術と人間はどのような関係にあるか、などを考察する領域が技術論である。きわめて単純化して言えば、ものづくりに関わる原理の考察がその

¹ ミームに対する批判として遺伝子よりも変化が激しいことが挙げられることがあるが（cf. 中尾 2015: 60, Richard 2019: 186 ff.）、語を硬直的な存在として捉える見方への代替案として、筆者はミームの柔軟性をむしろ積極的に評価している。

² とはいえ人間の認知のあり方からして、語は文と並んで比較的注目されやすい単位である可能性は高い。これは例えば英語において word がごく基本的な日常語になっているということからも間接的にかがえる。

主要なテーマの一つと言える。この観点から語を研究することは言語学ではまったく一般的でないが、語形成 (word formation) という用語を反省すれば、語と技術論的なアプローチには高い親和性があるものと思われる。

本稿では**技術**をおおむね「主体の目的達成を容易にする手法」のような意味で用いる³。水中を速く移動するために特定のフォームで身体を動かすこと、対象を切断するために鋭利な刃物を用いること、視力を矯正するために特製のガラスを眼にあてがうこと、こういった各種の「手法」はどれも技術の例である。一方、そのような技術において主体が利用する「モノ」、特に人工物を**道具**と呼ぶことにする (ナイフ、眼鏡など)。

以下 2.1 節では Arthur (2009) の技術論を参照し、2.2 節では語・概念、道具・技術、モノ・活動の関係を整理する。

2.1. Arthur (2009) の技術論

技術論には長い伝統と膨大な蓄積があり、それをここで仔細に検討することはできない⁴。そこで代表として Arthur (2009) を取り上げることにする。同書は技術ないしテクノロジーの一般的特性を包括的・原理的に考察した研究である。本節は彼によるテクノロジーの特徴づけを概観し、それが語の特徴とも驚くほど共通していることを指摘する。それにより、語を技術の一種と見なすことができる見通しが得られることとなる。

アーサーはテクノロジーに対して何度か異なる表現で規定を与えているが、大まかにまとめるならば「主体のある目的が達成されるように、何らかの現象・効果を活用できる形で要素を組み合わせたもの」のようになる。ここでいう現象・効果とは物理現象を典型とするが、より広く人間の行動に関わる効果 (例えば共同信念など) なども含む。したがってレーザーや MRI の使用などにとどまらず、貨幣経済や法の運用もテクノロジーの一種とされる。

テクノロジーの基本原則としては (1) 階層的な組み合わせ性、(2) 再帰性 (要素自体もテクノロジーである⁵)、(3) 現象の活用、の三点が挙げられる (Arthur 2009: 24)。これについて、前二者は語にも当てはまるのが比較的分かりやすい。語も組み合わせ的な性格を持ち、複合語であればその要素も語である。一方 (3) について、語が何かの現象・効果に依拠しているということは意識されることが少ないが、この基準も満たしていると考えられる。例えば音声言語であれば音響の性質などを利用しており、その他にも一般に共同注視や読心能力などといった人間の認知機能も活用していると言える。地球の環境や人体の構造、物理法則などが異なっていれば、語のあり方も現状とは異なっていただろう。

³ これは価値中立的な規定である。主体の目的が良きものであれ悪きものであれ、技術はその達成を容易にする (武器などを思い起こされたい)。戸田山・唐沢編 (2019: 28) にも関連する議論がある。

⁴ 総論としては Clark (2003)、村田 (2009)、Norman (2013)、鷲田 (2021) などを、各論としてギリシャ哲学における技術論については田中 (1987) および藤沢 (1990) などを参照されたい。特にプラトンは徳や正義などの性質を検討する中で、医術や航海術などの技術との並行性に訴えた (術の類比 craft analogy と呼ばれる)。本稿の発想もこれに近い。

⁵ 数学で単一要素からなる集合を考えるのに倣って、単一の要素しか持たない場合でもテクノロジーと呼んでいる (Arthur 2009: 33)。

さらにアーサーによると、テクノロジーには (i) 主要アセンブリと補助アセンブリの区分、(ii) 頻度効果ならびにユニット化、(iii) 少数の単純事例から多数の複雑事例が創出される性質、(iv) 経験の累積によるイノベーション、(v) 最適なものでなく偶然に普及したものが支配的になる現象⁶、(vi) 自己創出性なども観察される。どれも語や語彙の特性を思わせるものである⁷。例えば (i) の主要・補助という区分は、言語学でいう主要部と非主要部の区別と類比的である。また (ii) に関して、初期の DNA 増幅法は実験手法がゆるやかに組み合わせただけのものであったが、現在では (利用頻度の増加に対応して) その一連の操作を集約して実行できる特製の機械が確立し、効率的に処理されているという。同様に、特定の言語表現の組み合わせが使用頻度に応じて独立した「ユニット」(cf. Langacker 2008: 16) として定着するという現象は認知言語学において広く知られている。(vi) は特定の個人に帰属されにくい形で語彙に変化が生じる「自己組織化」を彷彿とさせる。

2.2. 道具、技術、人工物

語がどのようなものかを考えるとき、「道具」という特徴づけが与えられることがある。このモノ的な見方はありふれたものであり、日常的にも専門的にもそうした言明は観察される⁸。そもそも日本語や英語では「語」や word 自体が名詞であるためモノとしての捉え方は不可避に近く、それがさして有害でない場合も多い。しかし、その一面的な見方に囚われると語のプロセスの側面を見失ってしまう。すでに述べたように語には多面性があり、立体的な理解を得る上では動的な側面も無視できない。語という存在は静的な文字などに完全に還元されるわけではなく、人間の活動の一種でもあるのである (Langacker 2015: 131, 2019: 346)。このことは、語を用いる活動を表す「言う」「話す」のような動詞が存在することを考えると理解しやすい。

一般に、動的な活動が静的なモノとして捉えられるという現象には少なくとも二つの次元がある。一つ目は活動全体を何かの目的達成のための抽象的な道具として捉えるというものである。例えばじゃんけんは活動の一種であるが、ランダムな順位決定のための道具とも見なすことができる。二つ目として、ある活動に参加するモノに選択的注意が向けられる場合、モノとしての認識が優位になりやすい。例えば「人が刃物を使って何かを切る」という状況を考えると、その中でモノと活動は不可分に関わり合っている。しかし、そこに参加する人工物 (ハサミなど) に焦点を当てるならばモノとしての捉え方が優位となるわけである⁹。

語についても同様で、動的な側面と静的な側面が認められる。すなわち語は概念化や外在化などの活動からなり、さらに射程を広げると雑談などといった活動の一部でもある。一方、意思伝達などの「道具」と捉えると一種のモノということになり、また表記された文字なども静

⁶ ロックイン (lock-in)、レガシー問題 (legacy problem)、経路依存性 (path dependence) などと呼ばれる。よく例に挙げられるのはキーボードの QWERTY 配列である。

⁷ なおアーサー自身も設計と言語の平行性に言及しており、選択の適切性や要素の複合性を問うことができる、組み立て方の規則が「文法」と呼ばれるなどの点を指摘している。

⁸ ウィトゲンシュタイン『哲学探究』569 節も参照。

⁹ 認知文法的にはハサミが profile されていても base には活動があるということである。Arthur (2009: 29 ff.) の言い方であれば、装置 (device) と処理 (process) はテクノロジーの異なる側面だということである。

的なモノである。ただ、語にはモノとして捉えられやすい一般的傾向があるため、その偏重を是正すべく、個物としての意味合いが希薄な「技術」という呼称を積極的に用いる。語が技術であるという言い方をするとき、その「語」は「語使用」のことであると理解されたい¹⁰。

表 1. 静的・動的な側面の整理

	モノ ₁	モノ ₂	活動 ₁	活動 ₂
じゃんけん	順位決定の道具	具体的な手形	身体動作など	遊ぶなど
語	伝達などの道具	文字など	外在化など	雑談など

同様に、概念にも動的な側面と静的な側面を認める。概念が神経活動のパターンであれば、それは本質的に動的なものである (cf. Langacker 2008: 30)。さらに概念化それ自体がより大きな行為連鎖に埋め込まれているという点でも動的性格がある (上表の活動₂)。一方、静的なモノとしての概念に関しては、単に抽象的な何かであるといった程度の理解にとどまらず、**心的な人工物 (mental artifacts)** と見なす立場を採る¹¹。これは戸田山・唐沢編 (2011) のような概念工学と同様の路線であり、これにより技術論や文化進化の議論との接続が可能になる¹²。

ここで「心的な人工物」の範囲について補足しておく。水やイヌ、そよ風などの対象は人為と独立に成立していると感じられる。しかし一方で、我々が経験する世界それ自体も概念化を経ているものと考えられる (Langacker 2015)。したがってその意味では水やイヌ、そよ風なども心的に構築されたものであり、決して「ありのまま」ではない。だからと言って、そうしたもてまで心的な人工物と呼ぶと、その範囲が際限なく拡大し、自然物と人工物の対比が意味をなさなくなってしまう。この点については「人工物らしさ」という典型性を導入して対応しておく。人間による意図的設計が明確な対象であるほど、例えば〈オフサイド〉という概念¹³の方が (「ありのまま」ではなく心的に構築された経験対象としての) 水よりも、人工物らしさが高いと言える。前者はサッカーという人工的なゲームを機能させるために人間が意図的に考案した心的対象であるという点が明確なためである。こう考えることで自然物の領域は消去されずに済む。そこには水やイヌやそよ風など、人為の関与が意識されないような対象が引き続き含まれることになる。

3. モデルの検討

前節の議論を踏まえると語を技術として捉えるモデルは一定の成果が期待できるものと考え

¹⁰ 「語使用」という言い方は、モノとしての語という一般的な語の理解を踏まえて敢えて表現したものであり、筆者自身は基本的に (広い意味での) 使用と独立に語が存在するとは考えていないことに注意されたい。

¹¹ 本稿は人間を中心に議論するため「人工物」と呼ぶが、ヒト以外の種 (あるいは機械など) が概念を持たないと主張しているわけではない。

¹² ミームを「人工物 (ARTIFACTS)」「振る舞い (BEHAVIORS)」「概念 (CONCEPTS)」に分類する考え方があがるが (Croft 2013: 2.3.1)、振る舞いを通して概念を捉えるのが意味の使用説、人工物を通して捉えるのが概念工学だと整理できると思われる。語はこの三者にまたがるハイブリッドな (多面的な) 存在者である。

¹³ 本稿では山括弧を (言語表現や指示対象と区別されるところの) 概念を示すものとして用いる。

られる。本節ではこのモデルに依拠することで語という存在に関する多種多様な特性・現象が整合的に理解されるということを、3.1～3.7 節で順に示していく。

3.1. 時空的位置

語の存在論では「語はいつどこに存在するのか」という問いが検討課題の一つとなる。この論点は技術との比較によって解答の糸口が得られる。再びじゃんけんを考えてみよう。そのトークンないしインスタンスは実際にじゃんけんが行われている場に存在し、それが終われば消える（ただしその様子を撮影した写真などは残存する）。これは語トークンでも同様である。ある語のトークンは、それが外在化されている期間に限り、その場に存在するのである（ただし録音などは残存する）。

一方、タイプとしてのじゃんけんは共同体レベルで存在していると考えられる。じゃんけんは、それを会得した個々の成員の知識や、手順を記録した媒体などに依存しつつ安定的に存在しており、それらを一般化したものが慣習的なじゃんけんタイプである。語についても同様である。語は言語使用者の脳内やその他の記憶媒体（e.g. 辞書、ハードディスク）などに存在しており、それを一般化したものが慣習的な語タイプだと言える。しかしその一般化は結局どこにあるのかという問題が残る。これについてはアイデア界などに訴えるのではなく、個人の脳内や記録媒体に**分散**して存在していると考えられる立場を採る。

すなわち、個々の話者は慣習表現そのものだけでなく、それが慣習化しているという事実自体も知りうるということになる（Tomasello 2019, 萩澤・田中 2021）。これには信念帰属が関わするため原理的には無限後退が生じるが、実践的には志向性の共有（*shared intention*）などによって無害化されていると思われる。例えば「コロナ禍」が慣習的な語として存在するというためには、個々の話者が孤立的にその記号の知識を持つだけでは不十分であるが、その話者同士が知識を見積み合い、当の語が共有されているという信念が一定数の話者において成立していれば、慣習的な語タイプとして各話者に分散して存在していると思えることができる。

3.2. 機能

語が技術であるとする、その機能ないし目的は何だろうか。この点に関してウィトゲンシュタインの『哲学探究』を参照すると、11 節で個々の語の間に見られる類似性と多様性を道具箱の道具になぞらえつつも、14 節ではそのような「道具」の共通点を無理に設定することを牽制している。たしかに、あらゆる語に共通する一つの機能を指摘するというのは、本質主義・古典的カテゴリー観を前提とするものであり、達成困難な課題である。しかし、だからといって語が技術ではないことが直ちに導かれるものではない。家族的類似のような形でゆるやかなカテゴリーをなしている可能性があるからである。そして大部分の語について、それが使用者の生活を何らかのかたちで助けるものであるとは言えると思われる。

まず、語の主要な機能としてコミュニケーションや思考を補助するというものが指摘できる。そして *Name it to tame it.*（名づけることで手なずける）という英語表現があることから推察

されるように、語による名付けには対象を操作しやすくする機能がある¹⁴。例えば生活の中で名状しがたい問題を感じていたとして、それをコンパクトに指示する言語表現 (e.g. mansplaining) を作成・使用することで、問題の指摘や不満の表明などがしやすくなるわけである (cf. Solnit 2018)。さらに発話行為論やヤコブソンによる言語コミュニケーションの六分類などは語使用の機能を分類する試みとして理解できる。また Clark (1998) は協調的行為の補助なども語の機能として挙げている。

以上より、語はそれぞれ何らかの機能を持ち、多くの場合、使用者の助けになっていると考えられる。これは技術としての語というモデルからの自然な帰結である。次節では、こうした機能が常に十全に発揮されるわけではないことを見る。

3.3. 異常

語を「道具」と見なす場合、一般的な道具と違って語は物理的な個物でないという点がある主張が抱える難点の一つになる¹⁵。さらに道具は使用にあたって意識しやすいが、音声言語の場合、通常であれば語はただ単に口をついて出てくるのであり、外的対象として認識されにくい。これが二つ目の難点となる。

本稿のモデルは語を「技術」と見なすものであるため、一つ目の難点は回避される。さらに二点目も主客の非対称性を考慮することにより自然に説明される (Langacker 1998, 2015: 2.3 節)。例えばハサミはまず客体的な対象として意識が向けられるが、それを手に取って自然に使用すると主体の一部のようになり、あまり意識が向かなくなる。一方、語はその特性上、「まず手に取る」といった予備動作が意識されない。そのため、自然に運用されている限り、語は話し手や聞き手の一部となっており、語のトークンそれ自体には意識が向かいにくいのである (例えばある発話を聞く時、その内容と声色であれば内容の方が注目されやすい)。

しかし、例えばハサミの使用の場合、何らかの理由でうまく切れないことがあれば意識されやすくなる、あるいは逆に動作を意識するとスムーズに切れなくなるということはある。したがって、語の使用に何らかの異常が生じた場合には例外的に意識にのぼる、あるいは意識することで異常が生じるということが予想される¹⁶。現にそのような事例は存在すると思われ、ゲシュタルト崩壊がそれに当たる。特定の語の刺激を文脈独立的・反復的に受けると、主体の一部というより対象としての側面が際立ち、異物のようなものとして立ち現れるのである。

3.4. 変化

言語学が考察の対象にするような語の変化とは、ある特定の木が生長するようなプロセスよ

¹⁴ 一方で、対象を理解できていると誤解してしまう危険性もある。これは「名前の誤謬」(nominal fallacy) などと呼ばれる (Remedios 2018)。

¹⁵ 例えば、ある語を人から学んで自分でも使うというのは、コインをもらってポケットに入れ、またその同一のコインを取り出すという行為とは明らかに異なる (Kaplan 1990: 106)。

¹⁶ ハイデガー『存在と時間』では自然に使用されている状態を手許性・道具存在と呼び、異常が生じた状態を手前性・事物存在と呼ぶ。

りも、刃物の作成法が洗練されていくようなプロセスに近い¹⁷。すなわち同一個体の変貌ではなく別個体の入れ替わりである（萩澤 2020: 6 節）。しかもその変化には累積性がある。つまり個々の変化は文化的に蓄積され、次第に複合的になっていく。したがって、語の変化という現象は技術一般に見られる文化進化の事例として捉えられることになる。

議論の順序として、まず累積性の前提となる「概念の複合性」を検討し、その後に語の変化を文化進化と見なす議論を行う。

3.4.1 概念の複合性

直感的には、概念の複合性は語形の複合性と相関するように、例えば「水」よりも「カートリッジ内蔵型浄水器」の方が複合的な概念を表すように思われる¹⁸。形式の複合性に応じて複合的な概念になるというわけである。しかしこの点を認めたとしても、形態的に関連する語同士しか比較することができない¹⁹。概念が複雑化するのに応じて形式も複雑になると、実用に耐えないほど長大な語が生じてしまうため、適宜メトニミーやメタファーなどを用いて手頃な形式を作ってラベルとするのである。例えば〈オフサイド〉²⁰は非常に長い説明を要する複合的な概念であるように思われるが、そのことは形式から読み取れない（モーラ 5・形態素 2 では特に長大な語とは言えない）。したがって言語形式が概念の複合性の手がかりとして機能する範囲は限定的である。

概念の複合性を判別する手法の二つ目として、パラフレーズに訴える手法を検討する。これによると概念 A・B について、A が B のパラフレーズに含まれる関係が成り立っていれば A がより単純な概念ということになる。これは転換（conversion）における派生方向の確定に用いられることがある。例としてノコギリに関する名詞 saw と動詞 saw を考えよう。動詞の方は「道具 saw を使用して切断する」のように道具名詞に依存したパラフレーズが想定されるため、名詞の方が単純な概念を表すというわけである。この結果は直感に合致すると思われる。ところがこの判別法にも問題がある。前者のパラフレーズを「saw する行為に使用する道具」などとすれば、同一の基準を使っているにもかかわらず複合性の判定は逆転してしまうのである（Umbreit 2010: 310）。

この種の困難は saw をはじめとする一部の語彙項目に限られるものではない。クワインの根源的翻訳やグッドマンによるグルーの議論を参照すれば、任意の概念についてその内実を規定

¹⁷ タイプを論じている時であっても、タイプそのものは原理的に提示不可能なためトークンとして示さざるを得ない。このことがタイプ・トークンの混乱を招いている可能性がある。語について同一個体の変貌と言える事例としては書道の「二度書き」や誤字を消しゴムで消すような操作があるが、これらは語の派生と呼ばれるような変化とは明らかに異なる。

¹⁸ どれだけ複合的な概念であっても十分に定着すれば全体として一つのゲシュタルトをなし、結果的に単純なものと感じられることはあると思われるが、本節ではその点を保留として議論を進める。

¹⁹ なお認知文法では、例えば dance とその派生語 dancer について、両者の概念内容（conceptual content）は同一と考える（Langacker 1999: 45）。ただし、これはあくまでも喚起される情報の全体像が共通するというこゝろであって、捉え方（construal）のレベルにおいて両者の意味の区別は保証される。

²⁰ 英語の offside は位置表現を用いてその位置が関与する複雑な規則をコンパクトに指示しており、これはメトニミーの事例である。

する方法は常に複数想定できるとすら言える (Quine 1960, Goodman 1983)。概略のみを述べるとグルー (grue) とは「すでに観察されていてグリーン (green) であるか、まだ観察されておらずブルー (blue) である」という概念である。ある時点までに観察されたエメラルドがすべてグリーンだったとすると、そこから「あらゆるエメラルドはグリーンである」ということが帰納的に推論できる。そしてまったく同様に、同じ前提から「あらゆるエメラルドはグルーである」ということも導かれる。そして〈緑〉という一見単純な概念であっても、〈グルー〉を基礎としてそこから派生される複合概念である可能性があるのである (飯田 2016)。

以上を受けてなお、〈緑〉のような概念は〈グルー〉や〈オフサイド〉などより単純であると言いたくもなると思われる (cf. Langacker 2008: 45)。この直感は、概念の複合性が現実世界の条件や使用者の身体性など、言い換えると「生活形式」(Lebensform / form of life)²¹を考慮して初めて決まるものだという経験基盤的な概念観に基づくものである。仮に〈オフサイド〉を基準にして〈サッカーボール〉・〈蹴る〉などを(極端には〈緑〉のような概念までを)規定することが原理的に可能だとしても、この世界における我々の生活形式とは著しく異なるため、そうした概念体系は不自然に感じられるのである²²。このように概念の経験基盤性を重視する考え方は、概念を心的人工物とする見方と同一の内容を異なる観点から捉えたものと言える。

これほどまでに複合性の確定が困難であるのは、概念が物理的な個物でないため「どこまでが一つか」「どう組み合わさっているか」などを客観的に把握する方法が少なくとも現状では存在しないことが一因と思われる。以上を踏まえ、あくまで便宜的な措置ではあるが、経験に基づく「直感」を概念の複合性の基準として用いることにする。すなわち理論的には複合的でありうる概念も²³、直感として単純であれば単純な概念であると判断するということである。

3.4.2 累積的な文化進化

前節では、概念に複合性が問いうるという議論を行った。その内容を踏まえると、語が技術一般に見られる累積的な文化進化を経るという主張が可能となる (cf. 中尾 2015, Ridley 2015)。すなわち、一定の忠実性を保って文化的に継承され、徐々に変異が生じ、適応度に応じて選択ないし淘汰を受け、複合性が累積的に高まるということである。もちろんこれは語という存在のあり方そのものが進化するというのではなく、ある内容を伝える手段が洗練されたり、既

²¹ 『哲学探究』19節では以下のように述べられている。

(i) 戦闘における命令と報告だけからなる言語を想像するのは難しくない。一あるいは質問と、肯定、否定の表現からなる言語を。そしてその他無数のものを。——そして、ある言語を想像するとは、ある生活の形を想像することなのだ。

このように生活形式に訴えるという方策はグッドマンが *entrench* という概念で説明しようとしたことと同趣旨のものだと言える。

²² そもそも異なる把握の仕方を経た概念はもはや我々の持つ概念と同一ではない、という反応も考えられる。グルー概念やオフサイド概念を経由して規定された〈緑〉など、我々の知っている〈緑〉とは別物だということである。これは正当な主張であるが、新たな困難を招くものでもある。把握の仕方が同一であることが概念の同一性を保証するのであれば、複数の主体が(さらに同一主体でも異なる時点においては)厳密に同一の概念を保持することが不可能になりかねない。とはいえ、この点は実践的にはカテゴリー化能力によって乗り越えられているものと考えられる (3.7節も参照)。

²³ 色は自然科学の観点からも要素に分解されるが(彩度や明度など)、直感的には単純なように思える。

存の概念を組み合わせてさらに複雑な概念が考案されたりするという主張である。

語の淘汰については言語使用者の観点からでは実感しづらいが、分析者の観点から長期のスパンで追うと分かりやすい。例えば Ayto (2007) によると人種差別の関連語が使用されだした時期は次のようになっている：racialism (1907年)、racialist (1917年)、racist (1932年)、racism (1936年)。つまり racism / racist は後発だったが、徐々に使用の幅を広げ、最終的に racialism / racialist に取って代わったということである（これはあくまでも 21 世紀の時点から振り返った記述であることに注意されたい）。

語は「文化的」技術であるため、各世代が形式や概念を新たに最初から発明せずに済む。そのため時代を追うにつれて複合性が増していく。こうした複合性の累積についても英語語彙を通覧すると分かりやすい。例えば Ayto (2007) を見ると、因果関係はさておき、差別関連語の整備と人権意識の向上が平行的に生じていることが読み取れる²⁴。差別・偏見の概念をコード化する接辞-ism は現代英語においてかつてなく生産性が高くなっている。また、この累積性の議論が正しければ、ある言語共同体が「数」や「顔」といった語（やそれが表す概念）を持つことは、「複素数平面」「ルッキズム」などの語（やそれが表す概念）を持つことに先行するのであって、逆ではないことが予想される。

なお、現代英語は複雑な概念を表す語を豊富に備えているが、これは話者の多さとその交流の緊密さに帰せられるだろう。Arthur (2009) や Henrich (2016) は多数の使用者の経験が累積することで技術の発展が生じると指摘するが、それは語形成にも当てはまるのである。

3.5. 逆行分析

Henrich (2016: Ch. 7) は食行動の文化的適応について興味深い事例を報告している。ヘンリックによると、キャッサバやある種のウツボなど毒性のある食べ物について、きわめて複雑な毒抜き処理や妊娠中の摂食忌避などが文化的に継承されている共同体がある。そしてその成員は当の文化的行動の仕組みを明示的には理解していない。あえてそれを尋ねると、即席でひねり出した答えが返ってくるという。つまり、複雑な技術が継承され発展するにあたって、その内実を個人が理解している必要はないということである²⁵。ともあれ伝統的な手法を模倣・踏襲してさえいけば基本的には円満に生活できるのである。

このような共同体における成員の対象理解は一種の**逆行分析** (reverse engineering) に基づいていると言える。これは本来、再現を目指して市販製品などを観察し、その仕組みなどを推測するという行為をいうが、その分析対象を一般化した用語としても使用される (cf. Dennett 2017)。「設計図」が与えられているわけではないため、限られた手がかりから正確な理解をすることは専門家以外にとっては困難であることが多い。しかし、再現に正確な理解を要する製

²⁴ 『哲学探究』570節では以下のように述べられている。

(i) 概念が我々を探究へと導く。概念は我々の関心の表現であり、我々の関心を誘導する。

²⁵ この点に関して『プロタゴラス』(321D)の神話が示唆的である。人間は「技術を使う知恵」および「道義心と謙遜心(戒めと慎み)」を授かるとされる。このうち後者はまとめて「社会性」と解することができる (cf. 村田 2009: 22)。つまり、社会性があれば一部の成員しか詳細を知らなくとも当の技術は存続しうるのである。

品とは異なり、文化的振舞いは正確な理解がなくとも外面的に模倣すること自体は容易なのである（この点は3.7.2節でも再び取り上げる）。

語が文化的な技術であるならば、語の意味や構造などに対する理解も逆行分析として捉えられる²⁶。母語話者でも個々の語について、規範と一致しているという程度の意味で「正しく」理解しているとは限らない。それでも、その語の使用が他の話者と一致している限り、特に問題は生じない（萩澤 2018, 2020）。語に異分析が生じるのはこうした事情によるものである。

3.6. 制御の困難性

個人的に開発・習得し、個人で完結するような技術と異なり、じゃんけんは文化的技術である。個人的技術に対しては意図的な操作・制御が可能である一方、文化的技術はそうではない。じゃんけんのルールを共同体レベルで任意に変更することはきわめて困難である。じゃんけんの成立には他者が関わるため、個人の一存では慣習を操作できないのである。さて、語を使用するということの重要な機能の一つは、特定の形式を用いて特定の概念を想起させるということである。個々の連合関係（association）は一個人だけが独自に・私的に身につけていてもさほど役に立たない。ある形式である意味を表すという技術が共同体で共有されてこそ、当の語はその機能を十全に発揮する。個人的スキルとは異なり、語の使用には潜在的にはあれ相手が存在するのである。だからこそ本稿は語を単なる技術ではなく、文化的な技術として特徴づけているわけである。これにより、語に個人の制御が及びにくいという点を自然にとらえることが可能となる。

独自のじゃんけんを提案することはできても、それを共同体レベルで慣習化させることは困難であると同様に、個々の話者には、任意の記号を私的に使用する自由はあっても、共同体レベルでの慣習性を意のままに操作する力はないに等しい²⁷。これは経験的によく知られた事実である（cf. Cappelen 2018: Ch. 7, Schmid 2020）。先の2.1節で触れた「最適なものではなく偶然に普及したものが支配的になる現象」が生じることの一因はここにある。現用の語彙項目に何かしらの不備がある場合（差別意識が組み込まれているなど）、別の語彙項目に切り替えた方が望ましいが、そうした運動はなかなか容易ではないのである。

制御の困難性に関して、ロックは語の普及が共同体の他者に左右されるということを通貨のアナロジーを用いて指摘している²⁸。

(1) [M]oney by virtue of the stamp received in the public mint, which vouches its intrinsic worth, has authority to pass. This use of the public stamp would be lost, if private men were suffered to offer

²⁶ この道具立てを語彙論に適用するのは珍しいと思われるが、語を技術として捉えるというモデルにおいては語が「エンジニアリング」の対象になるというのは自然な発想である。

²⁷ 一方、共同体が個人から成る集団である以上、個人レベルでの語使用は共同体の慣習にわずかではあれ影響を与える。この点は母語話者が2人しかいない言語（あるいは家庭内の言語）を考えると分かりやすい。したがって、個人が共同体の慣習を操作するのが困難であるというとき、その困難さは共同体の規模と比例する。

²⁸ 直接的な文脈としては、ロックが知性に能動的な性格を認めるのに対し、それを新語乱造の能力と矮小化して批判する相手への応答である（勢力・古田 2016: 38）。

money stamped by themselves. On the contrary, words are offered to the public by every man, coined in his private mint, as he pleases; but it is the receiving of them by others, their very passing that gives them their authority and currency, and not the mint they come out of.

(Letter to Stillingfleet, in *The Works of John Locke*, vol. 3, p. 279)

貨幣は公的な鑄造所で刻印を受け、その内在的価値が保証されることで、流通する権威を持ちます。その刻印を個人が私的に押して貨幣として提供して良いということになれば、公的な刻印は使用されなくなってしまいます。ところが単語の場合、それを世間に対して提供するのはまさに個人であり、各自が私的な鑄造所で好きなように作っています。しかしながら、単語は他者に受け入れられ認められることで権威を持って流通するのであって、どの鑄造所で作られたかは問題ではありません。(引用者訳)

なお、語は貨幣などと異なり、そもそも「作成者の刻印を付ける」という行為が控えめに言っても普通でないという点にも注意されたい(注30を参照)。

3.7. 独立発明

技術が文化的であるというとき、それは教示や模倣を伴い、社会的に伝達されるという意味合いを持つ。語がそのような学習によって普及するという点は常識といってよい。ところが、従来では見過ごされてきたように思われるが、模倣とは別のルートで語が広まることもある。本稿の枠組みからすると、模倣によらない第二の普及経路、すなわち「独立発明」が存在することは自然に予測され、しかも適切な説明を与えることができる。

3.7.1 現象の導入と説明

同一の発明あるいは発見が(往々にしてほぼ同時期に)交流のない複数の人物によってなされるという事例は極めて多数存在することが知られる(Ogburn and Thomas 1922, Lamb and Gilbert 1984, Ridley 2015 など)。この現象は**独立発明**(independent invention)などと呼ばれる²⁹。微積分がニュートンとライプニッツの二者によって独立に発明された事例は特に有名である。また研究者にとって実感しやすい例として、研究上のアイデアを思いついた際に、同じ発想がすでに存在することを指摘されるケースがある(Lamb and Gilbert 1984: 75)。これも独立発明の例である。

この現象に説明を与える場合、二つのレベルが考えうる。一つは独立発明という現象を素朴に認めた上で、それが生じる要因を挙げるタイプの説明である。もう一つは、そもそも独立に発明された対象が「同一」と感じられること自体が説明を要する現象だと考え、その理由を挙

²⁹ 多重発見(multiple discovery)、同時発明(simultaneous invention)、あるいは単に multiple とも呼ばれる。ただ「発見」と言ってしまうと、主体による考案とは独立に蒸気機関車などがイデア的に存在していた、のような実在論的な含みが生じかねない(cf. Lamb and Easton 1984: xiii)。これは筆者の考えと相容れない。また、同時期の事例に限定しない方が本稿の議論としては都合が良い。そこで以下では「独立発明」の呼称を用いる。

げるものである。以下、この両タイプの説明を順に提示する。

一つ目のレベルの説明は先行研究でも繰り返し議論されている。その議論では「時代精神」(Zeitgeist) が引き合いに出されることが多い。しかしその内実が「機が熟したから」程度の漠然としたものならば、ほとんど説明になっていない。これを説明として成立させるためには、時代精神という用語を次のように再解釈する必要がある。すなわち、時期や地域がある程度近ければ、そこに属する人々が持つ知識、心身の能力や制約、入手可能な材料などの条件はおおむね等しくなる。そのため、直接的に交流のない複数の人物が同内容の発想にいたる蓋然性は高くなると言える。こうした諸条件を指す語として「時代精神」を広く解釈するならば(cf. Boring 1955)、一応の説明として機能するだろう。

一方、二つ目のレベルの説明としては、カテゴリー化能力に訴えることが考えられる。すなわち、作成者や考案状況の違いなどを捨象した上で同種の対象として捉えることがヒトの認知能力として可能だという事実を引き合いに出すわけである。可能どころか、そうしたカテゴリー化は多くの場合、自動的に生じる。誰が発明しようと微積分は微積分なのである³⁰。

しかし当然ながら、あらゆる発明が同一視されるわけではない。微積分と蒸気機関車は明らかに区別される。だとすれば、複数の発明を同種と見なすようなカテゴリー化はどのような基準で働いているのだろうか。その判断に貢献する要素は複数考えられる。当然ながら、まず外見上の類似性は一つの要因となるだろう。それに加えて、機能ないしアフォーダンスの共通性も要素として挙げられる³¹。例えば、かぶって用いる「笠」と開いて用いる「傘」は、細かな違いこそあれ、「人が屋外を移動する際に(主に頭部に)受ける風雨などを防ぐために設計された個人用の道具」であるという点は共通している。それゆえ両者はいずれも「かさ」と呼ばれるのである(本多・桑畑 1997)³²。さらに、厳密には人工物でないものでさえ機能の共通性があれば同一の対象として捉えられうる。ビーバーによる構築物が「ダム」と呼ばれるのはその一例である(これは、ヒトに関してだけでなくイヌなどの陸上移動も「走る」と呼ばれることと類比的である)。

独立発明は必ずしも同時期には限られず、大きく時期の隔たりがあるような事例も存在する。例えばオーパーツ(out-of-place artifacts)と呼ばれるものの一部が該当する。これに関連して、ウィトゲンシュタインが『反哲学的断章』で行っている思考実験を検討しよう(cf. Lamb and Gilbert 1984: 127)。

³⁰ さらに違った角度からの要因として、発明者の印を(微積分などの)アイデアそのものには付けることができないという点も指摘できる(前節のロックの議論も参照)。もちろん、微積分であれば計算法の呼称や表記システムに考案者の氏名などを入れるといったことは可能であるが。

³¹ car や ship の指示対象は技術発展と共に大きく変化してきたが、同一の語で呼び続けられているという現象も思い起こされたい。Ullmann (1952) はこの現象を「擬態変化(pseudo-changements)」と呼んだ上で、「言語の保守性と惰性から説明される」とする(邦訳 p. 51)。保守性と惰性が働く、つまり従来のもと同種の対象としてカテゴリー化されることの一因は、機能が共通しているからだと言える。

³² その一方で、地下室、バス停の屋根、レインコートなども風雨を防ぐための人工物ではあるが、移動に関与しない、外見上の類似性が低い、などの理由から「かさ」とは呼べない。さらに外見・機能に加え、先行技術の改良版を意図して作られているかという点も、先行技術と同一名称で呼ばれるかどうかに関与するだろう。

(2) 誰かが二〇〇〇年前にこのような形を



考え出し、「いつかこれが前進運動器具の形になるだろう」と言ったとしよう。

あるいは、誰かが蒸気機関のメカニズムを完全に設計したのだが、それがエンジンとして使えるとは、夢にも考えていなかったとしたら。

(MS 127 14r: 20.1.1943 ; 邦訳 p. 125、下線は原文)

時代は大きく隔っているにせよ、上で描かれたものを蒸気機関車の一種（を予言したもの）と見なすことは不自然ではない。むしろ、蒸気機関車とまったく無関係の何かであると捉えることの方が困難を伴う。それは外見や機能が類似・共通しているためである。古代ギリシャ哲学における原子の概念が現代の物理学における原子概念と連続するものと考えられていることも思い起こされたい³³。

3.7.2 語の独立発明

言語には他者とのやり取り・調整が本質的に関わる (Langacker 2010)。個々の言語使用事象 (usage event) は厳密にはどれも一つずつ異なるが、実践的にはカテゴリー化の働きによって細部の捨象や差異の無視などが生じることになる³⁴。そうでなければ言語は言語として機能しない。そのため、独立に同じ発想で語形成をした人が複数存在し、その語が観察された場合³⁵、それらの語は自動的にカテゴリー化の対象となり、単独の語タイプのもとにまとめ上げられる³⁶。独立に発明された語たちが融合するのである。

独立発明が報告・確認されている分野は多岐にわたるが、こと語形成に関しては科学や工学分野の比でないほど独立発明が多発していると思われる。このことの理由として、発明にかかる各種のコストが著しく低いということが指摘できる。単に形態素を心的に組み合わせるなどすれば良いだけであり、高価な材料や実験装置、(母語獲得以外の) 特殊な訓練などは不要である。思いつくまでの時間はさておき、組み立て自体には時間も大して必要でない。逆行分析の議論で指摘したように模倣も容易である³⁷。さらに、微積分の開発などが特殊で専門的な営み

³³ 原子に関しては先行概念を改良する意図の系列が存在することも、概念の連続性に寄与しているだろう。

³⁴ 例えば「コロナ渦 (うず)」という文字列を見ても「コロナ禍 (か)」と修正して (というより修正したことすら気づかずに) 理解するだろう。

³⁵ 本節では主に個別言語内の独立発明を検討しているが、個別言語を超えたレベルでも考えられる。いわゆる基礎語彙というのはどの言語共同体でも発明にいたるような語彙のことである。なお「概念工学」という名称 (や概念) も異言語間での独立発明の例である (戸田山・唐沢編 2019: 5)。

³⁶ 固有名でも同様である。ある子どもがナチスの指導者とはまったく独立に Hitler と命名された場合、そのことを承知していたとしても否定的なイメージが喚起されることは避けられない (Cappelen 2018: 123)。

³⁷ 独自商品は容易に模倣されてしまうと不利益を被るが、語は共有者が多いほど互換性が高まるため、使用者にとって利便性は増す。

であるのに対して語形成はごく日常的な言語使用の一部であり、携わる人数が比較にならないほど多いという点も重要な一因だと思われる。

こうした語の独立発明がまれな現象でないことを実感するには、二回語 (dis legomenon) を考えると良い。なお以下では現実に存在するコーパスを例に話を進めるが、理念的には、あらゆる発話を網羅的に記録した「理想的なコーパス」で議論すべきものである。さて、あるコーパス内でトークン頻度が1である一回語 (hapax legomenon) は、その発話者が独自に発明したものと便宜的に見なすことができる³⁸。そして一般に大規模コーパスで語の頻度分布を見ると、タイプとして多く観察されるのはトークン頻度の低い語である (つまり、ごく限られた数の語が圧倒的に高い頻度で生起しており、大多数の語は生起数が少ない)。したがって二回語は一回語に次いで大量に確認されるわけである。具体的には一回語が全体の40~60%ほど、二回語は10~15%ほどを占める割合になる (Kornai 2008: 72)。ではその大量の二回語について、2つのトークンの発話者が異なる場合、A氏の発話する一回語を参照・模倣してB氏も発話し、結果として二回語が生じたというような継承関係がある可能性はどれほどだろうか。あくまでも推測にとどまるが、その可能性はきわめて低く、大部分は独立発明だと考えるのが妥当と思われる³⁹。しかもこの議論が適用されるのは二回語にとどまらない。三回以上のトークン頻度を持つ語についても常に独立発明の可能性があるのである。

別の証拠として、*Oxford English Dictionary* の語源欄に Of multiple origins という記述が多数見られるという事実がある (2021年6月の段階で4600件以上)。その一例である environment を見ると、フランス語からの借用と英語内での語形成という複数のルーツがあるとされる。個々の使用について、いずれの由来を持つものかを区別することは事実上不可能であり、両者が融合したからこそ同一の項目内で記述されているのである。

なお、語の場合でも大きく時代を隔てた独立発明が確認される。一例として OED の項目 hockey の一部を抜粋したものを挙げる (用例内の強調は引用者によるもの)。

- (3) **Etymology:** Origin uncertain; but the analogy of many other games makes it likely that the name originally belonged to the hooked stick. Cf. *hoquet* ‘shepherd’s staff, crook’, suits form and sense; but connecting links are wanting. The isolated occurrence of the word in 1527 is very remarkable. It is not certain that Cowper’s ‘sport’ was the same.

1527 *Galway Stat. in 10th Rep. Royal Comm. Hist. MSS* (1885) App. v. 402 The horlinge of the litill balle with **hockie** stickes or staves.

1785 W. COWPER *Let.* 5 Nov. (1981) II. 392 The boys at Olney have likewise a very entertaining sport, which commences annually upon this day [5th Nov.]. They call it **Hockey**, and it consists in dashing each other with mud, and the windows also.

³⁸ 現実のコーパスの場合、単に使用機会の少ない語だという可能性もあるため、あくまで便宜的な想定である。

³⁹ ただし、独立に参照した共通のソースが存在するという、間接的な模倣関係があるケースも考えられる。

項目執筆者が注記しているように、初出として挙げられている用例は異様に年代が早く、少なくとも記録の上では孤立している。それでも *hockey* という語タイプの一事例としてカテゴリー化され、結果としてこの項目に組み入れられるにいたっているわけである。

4. おわりに

本稿では雑多なトピックを広く浅く検討した。個々の議論には掘り下げる余地があるが、語の多様な性質が「文化的技術としての語」という一貫したモデルで捉えられることが示せていれば本稿の目的は達成されたと言える。改めて述べておくと、語という存在のあらゆる性質が本稿の枠組みに収まるわけではない。人間を冒して感染していくウイルスのように捉えた方が適切な面もある。生物種のように考えられる面もある。境界の明確なブロックのような側面も当然ながらある。このような見方を重ね合わせていくことで、近似的にはあれ、語という存在の全貌が理解できるようになると考えられる (cf. Richard 2019: 204)。

ベルクソンは『思考と動くもの』で次のように述べている。

- (4) 物質的にも精神的にも創造すること、さまざまな事物を制作し、自己自身を制作すること、それがヒトの本性であるとわたしは信じている。ホモ・ファベル (Homo faber = 制作するヒト)、それがわたしの提唱する [ヒトの] 定義である。ホモ・サピエンス (Homo sapiens = 知識あるヒト) という名称、それはホモ・ファベルがその制作行為を反省するところから生まれたもので、ホモ・ファベルが純粋知性によってその純粋知性に関する問題群を解決している限りで、わたしもそれが人類にふさわしい名称であると思う。

(邦訳 p. 115、傍点・挿入は原文)

本稿は基本的にこの主張に賛同するものである。ベルクソンの述べるように、道具を作成し、技術を活用することで個体の能力は拡張される。この考え方は *extended mind* 論として広く知られている (Clark 2003)。本稿はその流れに連なるものとして、語も一種の技術と見なすことができるかと論じた。ヒトは語を作成し、それを共同体の中で継承・発展させ、高度な知を手に入れた。語および語形成をより深く理解するには、こうしたホモ・ファベルの観点に基づく考察が求められる。

参考文献

- Arthur, W. Brian (2009) *The nature of technology. What it is and how it evolves*. New York: Free Press. 日暮雅通 (訳) 『テクノロジーとイノベーション：進化／生成の理論』東京：みすず書房。
- Ayto, John (2007) *A century of new words*. Oxford: Oxford University Press.
- ベルクソン, アンリ (2017) 竹内信夫 (訳) 『思考と動くもの』東京：白水社。
- Boring, Edwin G. (1955) Dual role of the *Zeitgeist* in scientific creativity. *Scientific Monthly* 80, 101–106.

- Cappelen, Herman (2018) *Fixing language: An essay on conceptual engineering*. Oxford: Oxford University Press.
- Clark, Andy (1998) Magic words: How language augments human computation. In: Peter Carruthers and Jill Boucher (eds.) *Language and thought: Interdisciplinary themes*, 162–183. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, Andy (2003) *Natural-born cyborgs: Mind, technologies, and the future of human intelligence*. New York: Oxford University Press. 呉羽真・久木田水生・西尾香苗 (訳) 『生まれながらのサイボーグ：心・テクノロジー・知能の未来』東京：春秋社。2015年。
- Croft, William (2013) *Explaining language change: An evolutionary approach*. 2nd edition (revised). Oxford: Oxford University Press. <https://www.unm.edu/~wcroft/Papers/ELC2-Chap02.pdf> [accessed April 2021]
- Dennett, Daniel (2017) *From bacteria to Bach and back: The evolution of minds*. New York: W. W. Norton. 木島泰三 (訳) 『心の進化を解明する：バクテリアからバッハへ』東京：青土社。2018年。
- 藤沢令夫 (1990) 「序——いま「技術」とは」宇沢弘文・河合隼雄・藤沢令夫・渡辺慧 (編) 『技術とは』(岩波講座 転換期における人間 7) 2–37. 東京：岩波書店。
- Goodman, Nelson (1983) *Fact, fiction, and forecast*. 4th edition. Cambridge, Mass. and London: Harvard University Press. 雨宮民雄 (訳) 『事実・虚構・予言』東京：勁草書房。1987年。
- 萩澤大輝 (2018) 「素朴理論から見る認知形態論」『東京大学言語学論集』(TULIP) 40, 21–38.
- 萩澤大輝 (2020) 「語形成のそもそもを考える」『東京大学言語学論集』(TULIP) 42, 41–58.
- 萩澤大輝・田中太一 (2021) 「ミームとしての言語—慣習性を問い直す」『日本認知言語学会論文集』21, 161–173.
- ハイデガー, マルティン (2013) 高田珠樹 (訳) 『存在と時間』東京：作品社。
- Henrich, Joseph (2016) *The secret of our success: How culture is driving human evolution, domesticating our species, and making us smarter*. Princeton, NJ: Princeton University Press. 今西康子 (訳) 『文化がヒトを進化させた：人類の繁栄と〈文化-遺伝子〉革命』東京：白揚社。2019年。
- 本多啓・桑畑和佳子 (1997) 「名詞の多義について—IPAL 名詞辞書のための研究から」『言語処理学会第3回年次大会発表論文集』83–86.
- 飯田隆 (2016) 『規則と意味のパラドックス』東京：筑摩書房。
- Kaplan, David (1990) Words. *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supplementary volume: 93–119.
- Kornai, András (2008) *Mathematica linguistics*. London: Springer.
- Lamb, David and Susan M. Easton (1984) *Multiple discoveries: The pattern of scientific progress*. Trowbridge: Avebury.
- Langacker, Ronald W. (1998) On subjectification and grammaticalization. In: Jean-Pierre Koenig (ed.) *Discourse and Cognition: Bridging the Gap*, 71–89. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. New York: Oxford University

Press.

- Langacker, Ronald W. (2010) How not to disagree: The emergence of structure from usage. In: Kasper Boye and Elizabeth Engberg-Pedersen (eds.) *Language usage and language structure*, 107–143. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Langacker, Ronald W. (2015) Construal. In: Ewa Dąbrowska and Dagmar Divjak (eds.), *Handbook of cognitive linguistics*, 120–143. Berlin and Boston: De Gruyter Mouton.
- Langacker, Ronald W. (2019) Morphology in cognitive grammar. In: Jenny Audring and Francesca Masini (eds.) *The Oxford handbook of morphological theory*, 346–364. Oxford: Oxford University Press.
- Miller, J. T. M. (2020) The ontology of words: Realism, nominalism, and eliminativism. *Philosophy Compass*, 15 (e12691). <https://doi.org/10.1111/phc3.12691> [accessed May 2021]
- 村田純一 (2009) 『技術の哲学』 東京：岩波書店.
- 中尾央 (2015) 『人間進化の科学哲学：行動・心・文化』 名古屋：名古屋大学出版会.
- Norman, Donald A. (2013) *The design of everyday things*. Revised and expanded edition. New York: Basic Books. 岡本明・安村通晃・伊賀聡一郎・野島久雄 (訳) 『誰のためのデザイン？ 認知科学者のデザイン原論』 (増補・改訂版) 東京：新曜社. 2015 年
- Ogburn, William F. and Dorothy Thomas (1922) Are inventions inevitable? A note on social evolution. *Political Science Quarterly* 37, 83–98.
- Oxford English Dictionary Online* (OED) <https://www.oed.com> [accessed May 2021]
- プラトン (2010) 中澤務 (訳) 『プロタゴラス——あるソフィストとの対話』 東京：光文社.
- Quine, Willard Van Orman (1960) *Word and objects*. Cambridge, Mass.: MIT Press. 大出晁・宮館恵 (訳) 『ことばと対象』 東京：勁草書房. 1984 年.
- Remedios, Richard (2018) Nominal fallacy. In: Jennifer Vonk and Todd Shackelford (eds.) *Encyclopedia of animal cognition and behavior*. Cham: Springer. https://doi.org/10.1007/978-3-319-47829-6_357-1 [accessed May 2021]
- Richard, Mark (2019) *Meaning as species*. New York: Oxford University Press.
- Ridley, Matt. (2015) *The evolution of everything: How new ideas emerge*. New York: Harper. 大田直子・鍛原多恵子・柴田裕之・吉田三知世 (訳) 『進化は万能である：人類・テクノロジー・宇宙の未来』 東京：早川書房. 2018 年.
- Schmid, Hans-Jörg (2020) *The dynamics of the linguistic system: Usage, conventionalization, and entrenchment*. Oxford: Oxford University Press.
- 勢力尚雅・古田徹也 (2016) 『経験論から言語哲学へ』 東京：放送大学教育振興会.
- Solnit, Rebecca (2018) *Call them by their true names: American crises (and essays)*. Chicago: Haymarket Books. 渡辺由佳里 (訳) 『それを、真の名で呼ぶならば：危機の時代と言葉の力』 東京：岩波書店. 2020 年.
- 田中美知太郎 (1987) 「技術」 (『善と必然との間に』 所収) 『田中美知太郎全集 第一巻』 (増補版) 407–453. 東京：筑摩書房.

- 戸田山和久・唐沢かおり（編）（2019）『〈概念工学〉宣言！』名古屋：名古屋大学出版会。
- Tomasello, Michael (2019) *Becoming human: A theory of ontogeny*. Cambridge, Mass.: Belknap Press.
- Ullmann, Stephen (1952) Quelques principes de sémantique générale. *Orbis* 1, 171–175. 山口秀夫（訳）
「一般意味論の原理」『意味論研究』（英語学ライブラリー11）45–52. 東京：研究社. 1957年.
- Umbreit, Birgit (2010) Does *love* come from *to love* or *to love* from *love*? Why lexical motivation has to be regarded as bidirectional. In: Alexander Onysko and Sascha Michel (eds.) *Cognitive perspectives on word formation*, 301–333. Berlin / New York: De Gruyter Mouton.
- 鷲田清一（2021）『つかふ：使用論ノート』東京：小学館。
- ヴィトゲンシュタイン，ルートヴィヒ（1999）丘沢静也（訳）『反哲学的断章—文化と価値』東京：青土社。
- ヴィトゲンシュタイン，ルートウィッヒ（2020）鬼界彰夫（訳）『哲学探究』東京：講談社。

Words as Cultural Techniques

HAGISAWA Daiki

hagisawa_daiki@yahoo.co.jp

Keywords: word, technology, conceptual engineering, cultural evolution, independent invention

Abstract

What are words? This article attempts to answer this ontological question in terms of philosophy of technology. Drawing on Arthur (2009), I start by presenting a model according to which words are regarded as cultural techniques. I go on to demonstrate that within this model, compelling accounts are given of a wide array of phenomena associated with words, including their spatiotemporal position, function, malfunction, cumulative change, difficulty of control, reverse engineering, and independent invention, thereby providing a better understanding of words and word formation.

（はぎさわ・だいき 神戸市外国語大学大学院）